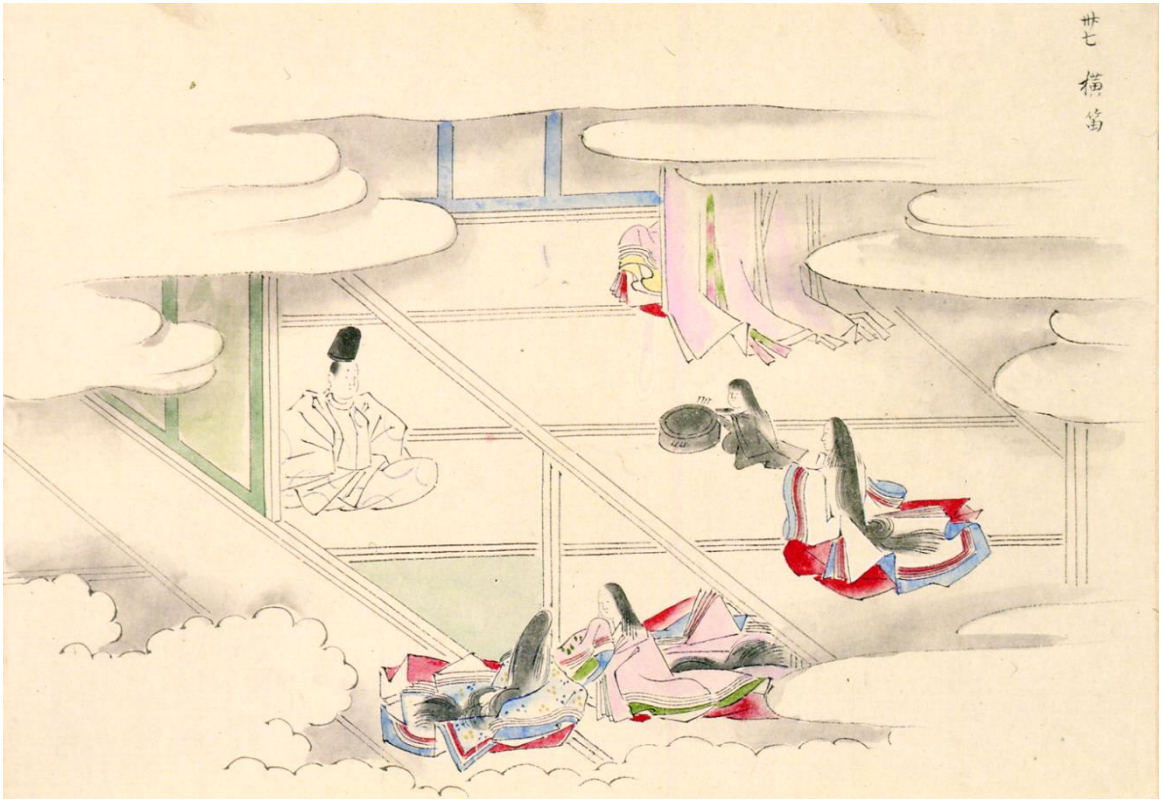
第142回　鶴見大学図書館貴重書展

源氏物語　飲んだり食べたり



平成28年2月1日（月）～2月27日（土）

講演会「飲食小景－国文学者の拾った用例－」

日時　2 月 27 日（土）14：00～15：00
会場　図書館地下 1 階ホール
講師　高田信敬（本学文学部教授）
※事前申込不要　直接会場へお越しください

鶴見大学図書館・源氏物語研究所

後援：紫式部学会・武蔵野書院　　協力：横浜市鶴見図書館

新春の貴重書展示は、吉例により毎年源氏物語研究所が引き受けております。今回は、飲食表現に的を絞り、楽しく御覧いただける催しといたしました。

源氏物語と言えば、品良く雅やかな古典文学である、とお考えでしょう。某とて、食い意地の張った野卑な物語とは思いません。しかし、飲んだり食べたりの場面は結構多いのです。しかも、果物であれお酒であれ、平安時代摂関期の食物風俗を記録した文章に止まらず、秀抜な小道具として効果的に用いられていることには、さすが紫式部と唸らされるばかりです。たとえば、氷への対応によって女房と女主人とを書き分け、「ひそく」（秘色）を点出して高貴な家柄の零落を表現するなど、器も含め飲食の種々相は、最重要の、とまでは勿論言えずとも、物語の大切な要素であることに疑いありません。

さて、展示を担当します当研究所は、立派な看板（貞政少登先生御揮毫）はあっても独自の施設や専任担当者を持っておりません。古典文学や書誌学に詳しい教員が知恵を出し合い、あらゆる研究の基礎となる古典籍の収集に努めております。

ご存じのように、源氏物語を巡っては、年間５００本もの論文が公刊され、華やかに議論を展開する賢い方々が多くいらっしゃいます。しかしどのような研究であっても、それらを根底に於いて支える資料なくしては、所詮砂上の楼閣です。当研究所では、優秀な資料を捜すことが最大最優先の仕事であり、その結果、学会や市民の方々にも親しまれる貴重書コレクションが形成されました。その中から、主題に関わる書物を並べ、お目に掛けます。ささやかな催しですが、お楽しみいただければ幸甚これに過ぐるものがございません。では、ごゆっくりどうぞ。

平成丙申夾鐘上浣
源氏物語研究所　　髙田信敬

＊立案・解題は高田の担当です。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。また、図書館所蔵の典籍のみでは足りない箇所に対し、個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力感謝します。

源氏物語　飲んだり食べたり　　＊＝個人蔵

展示書目

Ⅰ　春の食材

1	蒔絵箪笥入源氏物語　初音　江戸時代前期写	列帖装５４冊
2	源氏物語　若菜上　古版本・古活字貼込紺表紙　江戸時代前期写	列帖装５４冊
3	源氏物語絵巻　横笛　天保２年（１８３１）幽遠斎画	巻子本３軸
	(参考) 絵入源氏物語　横笛　慶安３年（１６５０）跋　承応３年（１６５４）刊	袋綴６０冊
4	源氏五十四帖　早蕨　尾形月耕画　明治２５年（１８９２）横山良八刊	１枚＊

Ⅱ　菓子あれこれ

5	源氏物語　若紫　未装幀升形残欠本　江戸時代前期写	列帖装１８冊
6	古活字版源氏物語　薄雲　伝嵯峨本　慶長（１５９６～１６１５）頃刊	袋綴１４冊
	(参考) 源氏五十四帖　薄雲　尾形月耕画　明治２５年（１８９２）横山良八刊	１枚＊
7	源氏物語抄（紹巴抄）　若菜上　古活字版　寛永（１６２４～１６４４）刊	袋綴２０冊
8	花鳥余情　宿木　江戸時代後期写	袋綴１０冊
9	絵入源氏物語　蜻蛉　万治３年（１６６０）林和泉掾刊　横本	袋綴２９冊
	(参考) 枕草子春曙抄　特製本　延宝２年（１６７４）北村季吟跋	袋綴１２冊

Ⅲ　御馳走と食器

10	源氏物語　末摘花　青表紙本・河内本両系統混合本　室町時代後期写	袋綴７冊
	(参考)河海抄　江戸時代初期写　巻１欠	袋綴１９冊
11	源氏物語　須磨　藤原季有筆　江戸時代前期写	列帖装６冊
12	源氏物語　賢木　奈良絵本　江戸時代前期写	列帖装１冊
13	少女巻抄注　文政１０年（１８２７）刊　鳥野幸次旧蔵	袋綴１冊
14	源氏物語　宿木　元禄３年（１６９０）中臣祐俊筆	包背装１０冊

Ⅳ　喜び・悲しみ・笑い

15	源氏物語　桐壺　江戸時代前期写	列帖装１冊
16	十帖源氏　行幸　万治４年（１６６１）刊	袋綴１０冊
17	源氏物語　藤裏葉　江戸時代初期写	袋綴１冊
18	源氏物語　若菜下　桔梗唐草文様表紙本　室町時代後期写（９冊補写）	列帖装５２冊
19	源氏物語　夢浮橋　中山篤親等寄合書　（付）筆者目録	列帖装５４冊
20	絵入源氏物語　帚木　小型本　江戸時代前期刊	袋綴３０冊

〇本文の引用に際しては通行の文字を用い、適宜読点・濁点を振る等の処置をしました。また巻冊数は当該典籍全体のそれを示し、展示されている書物の数ではありません

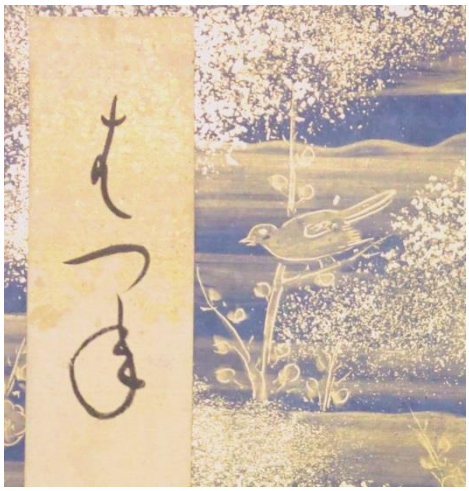
源氏物語　飲んだり食べたり　　＊＝個人蔵

Ⅰ　春の食材

厳しい冬を越えて鮮やかに野山を彩る緑、それは季節の食材でもあります。源氏物語では野や山で採れるものが多く描かれ、登場人物の置かれた境遇あるいは自然環境や季節感を語る、大切な脇役となっています。

１　蒔絵箪笥入源氏物語　初音　江戸時代前期写　　列帖装54冊

各帖の内容に合わせた下絵を持つ縹色紙表紙（縦２３．７、横１６．７糎）は、金泥・金箔を贅沢に用い、押発装のある原表紙の美本。当該初音巻では、春の六条院を豪華に描く。上の枝に止まる鶯が肥満気味であるのはご愛嬌（右下図版）。表紙中央に金泥装飾絹地題簽（縦１４．９、横３．０糎）を押し、本文の写し手とは別筆にて巻名を書く。巻名筆者は全巻の題簽を揮毫し、本文書写者よりさらに能筆と見られる。卍繋ぎ艶刷りの金紙見返しも含め、原装のまま箱と共に伝来した。その過程で綴じ糸が切れ、紺の元糸から紫絹糸に変えられた。空蟬・夕顔・若紫・関屋・絵合・胡蝶に複雑な錯簡が生じたのは残念である。



本文は、精良な厚手斐紙に定家様の影響ある筆跡で毎半葉１０行２４字程度書写。ただし分量の少ない花散里・関屋・篝火は８行とし、墨付き丁数を増して不体裁にならないよう工夫する。まま朱点を施すが、初音巻にはない。和歌１首２字下げ２行書き、その末尾は直接地の文に続く。青表紙本系統の三条西家本・肖柏本に近い。同筆とおぼしき傍書「色つきはじめ」（１オ）の下線部に「そめ」、「たぐひなき」（２ウ）に「くもり」、「もてなし」（５オ）に「はやし」、「御かへり」（６ウ）に「返し」、「きみたちそことに」（１５オ）に「ン・ら」等とある。これらのうち、最初の例は他本に「色づきそめ」とあったことになるが、同一本文を見ない。

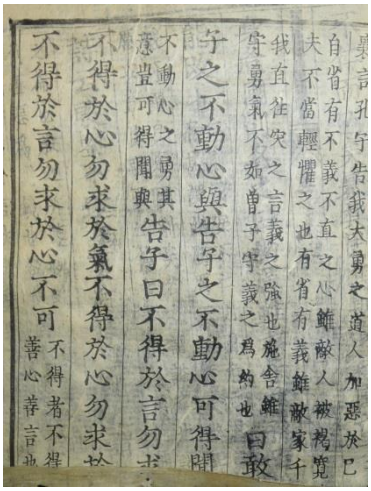
古典籍の見応えは勿論、蒔絵の書物箪笥もまた、工芸史上貴重である。蓋オモテ・箱側面・背面に仙翁を主題とする秋草金銀泥蒔絵が施され、螺鈿・高蒔絵の巻名を散らす。天板中央の提鐶や蓋の錠金具にも唐草彫刻と鍍金あり。この箪笥とほぼ同体裁・同規模の謡本箪笥が静嘉堂文庫美術館に存し、両者工房を同じくするのではないかと考えられる。仙翁は安土桃山時代から江戸時代前期にかけて好まれた画題であり、掲出本と共に１７世紀の制作と推定。

春の初めの食材は、なんと言っても鏡餅。展示箇所見開き左面に、六条院の正月風景が描かれる。５行目後半から「はがための／いはひしてもちゐかゞみをさへとりよせてち／とせのかげにしるき年の内のいはひども」がそれ。当時の歯固（はがため）には、押鮎・大根・瓜の漬け物などを用いた。

２ 源氏物語 若菜上 古版本･古活字貼込紺表紙 江戸時代前期写　　列帖装54冊

金銀泥にて若草・子の日の松等を描いた紺色紙表紙（縦２４．４、横１７．７糎）。表紙絵は概ね古雅、**１蒔絵箪笥入源氏物語**の巧緻さはない。中央に金銀泥下絵朱地題簽（縦１２．３、横２．９糎）を押し、巻名を書く。本文・題簽ともに１筆か。見返し、本文共紙.。奥書・識語・旧蔵印等、伝来を語るものなし。全体に虫損を蒙っているのは惜しまれる。

本文は厚手斐紙を用い、毎半葉１０行２２字前後。和歌１首２字下げ２行書き、その末尾は直接地の文に続く。青表紙本系三条西家本に近いが、なお各帖の精査を要する。注目すべきは、５４帖のほぼ全ての表紙に、古版本・古活字版の刷り反古が用いられていること。現状では、大多数の冊において表紙と見返しとがしっかり糊付けされており、表紙裏反故の確認出来る巻は少なく、その具体的内容は、極めて刷りのよい『孟子』の整版本・寛永頃刊と思われる古活字版２種以上（漢字・平仮名）である（右下図）。蓬生巻の後表紙分は少なくとも２枚の反古を芯に用い､「よもきふ　おもてよもきおひたるところ　露ふかきてい　うら　むくら」の墨書が見え､絵師への指示と解される｡そして文言の通り、表紙には露滋く置いた蓬を描く。書物の仕立て過程を復元考察するための好資料として、価値が高い。版本の仕立て方から類推するならば、寛永（１６２４～１６４８）に近い時期の写本制作ではないだろうか。版種の特定に関しては、専門家の判断に俟ちたい。また、行幸・椎本・夢浮橋の前表紙には白界（幅約２～２．５糎）を引いたような凹凸が見られ､これもおもしろい書誌学的研究材料となろう。版本の表紙制作に関しては、渡辺守邦『表紙裏の書誌学』が必読文献。



展示箇所は、巻名の由来となった光源氏への若菜献上。見開き左側８行目以下「正月廿三日ねのひなるに左／大将の北方わかなまいりぬ」以下、地敷４０枚・螺鈿の御厨子・沈香の折敷・折櫃物４０など贅を極めた賀宴が催される。この巻は大部ゆえか、食物に関する表現に事欠かない。出家した朱雀院のための精進物・儀式に出される屯食・酒の肴としての「からもの」（干した魚鳥肉）・餅菓子や果物（**８紹巴抄**参照）など、興味深い用例が多くある。

３ 源氏物語絵巻 横笛 天保2年（1831）幽遠斎写　　巻子本3軸

薄手楮紙（縦２８．６、横３８．０糎）に各巻１図を原則として全５４図。ただし橋姫巻には２図あり、その次の椎本巻の分を欠く。２０槿～２６常夏の間に錯簡が存し、また螢と常夏は相互に図柄が入れ替わっている。後述のように、掲出本は狩野探幽と伝称される資料を幽遠斎が模写した絵巻であり、錯簡と図柄の入れ替わりから推測すると、原拠資料は順序標記も巻名もないような形であったか。当館に入って裏打ち補修、鬱金色絹表紙３巻に仕立てる。題簽「源氏物語絵巻　上（～下）」は、貞政少登先生（本学名誉教授・前独立書人団理事長・日展参与）に揮毫していただいたものである。

上巻冒頭に厚手楮紙（幅約５糎）を張り、「源氏五十四帖　探幽」と墨書。この部分は汚れ・手沢が目立つので、元表紙の一部か端裏書かを切り取り、裏返して継いだものと推さ

れる。続いて絵師幽遠斎識語「五十四帖／引謌／山路露／系図／爪印上／同　中／同　下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠斎写」がある。本文５４帖に引歌以下の６帖を加え６０帖とする構成は、次の **(参考) 絵入源氏物語　慶安３年（１６５０）跋　袋綴６０冊**に相当し、その広汎な影響の１例と考えられる。ただし狩野探幽（１６０２～１６７４）の原図に基づくか否かは確証がなく、幽遠斎についても『椿図』（都立中央図書館加賀文庫）以外の作は知られていない。絵柄は概ね**絵入源氏物語**と一致するが、縦長の図を絵巻に適する横長画面とし、屋外の風景に力を入れたり、打ち込みの強い狩野派の描線を駆使したり、淡く品のよい賦彩を施したりと様々な工夫が見られる。

上巻１３図・中巻２０図・下巻２１図のうち、下巻の横笛巻を選んだ（表紙図版参照）。柏木椎大納言没後の春、「山の帝」（朱雀院）から女三宮へ筍・ところ（自然薯）が手紙と共に送られる。寝ていた若君（薫）は起き出して筍を盛った罍子（らいし）に近づき、「雫もよよと食ひぬらしたまふ」と言う有名な場面である。「白き薄物に唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて」が『源氏物語』の表現であるけれども、絵巻では墨染めの衣の如く、また若君の口元に描かれる食材も、一向に筍とは見えない。筍については、今野鈴代「六条院の筍料理一地火炉次のこと一」（『源氏物語』表現の基層』第五編）が楽しくかつ有益である。

(参考)絵入源氏物語　横笛　慶安3年(1650)跋　承応3年(1654)刊　　袋綴60冊

紺色無地紙表紙（縦２７．０、横１８．２糎）中央に間合紙題簽（縦１６．７、横３．４糎）を押し、「よこふえ　二十二　歌を名とせり」と刻す。押発装を持つ５目綴じの原装。朱の綴じ糸も当初のものか。本文は無郭、毎半葉１１行２１字前後（印刷面縦２０．５、横１５．５糎程度）、平仮名に適宜漢字を交え、濁点・句読点・簡単な傍注を施す。大和絵風挿絵の効果も加わり、親しみやすい書物となっている。夢浮橋・『引歌』末尾に八尾勘兵衛の刊記。本文５４冊に『源氏目案』以下６冊を加える。

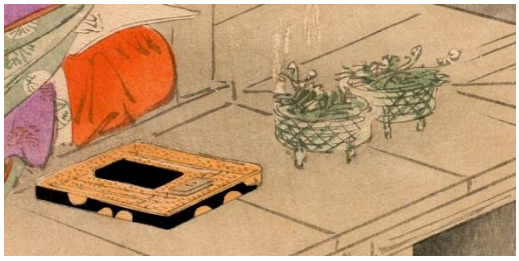
絵は片面と見開きの２種あり、片面の場合４周単辺（縦１８．７、横１４．５糎）内に収める。絵は蒔絵師山本春正（１６１０～１６８２）の筆。春正は歌人・古典学者としても著名であり、掲出本の他に『古今類句』３６冊の出版も行っているので、相当の資力を備えていた人物であろう。この絵入本が後出の典籍や絵画に与えた影響は大きく、版本のみならず写本にも及ぶ。

左側の絵に筍を囓る薫君が描かれる。**３源氏物語絵巻**と比較すると、構図・登場人物の数などが一致し、依拠関係を確認しうる。明瞭に筍らしい筍が描き込まれる点は、さすがに種本と言うところ。なおノドに刷られた「ア六」は巻の順序と丁付である。巻標示はイロハによるが、４８帖早蕨の次はどうなるか、お考え下さい。

４　源氏五十四帖　早蕨　尾形月耕画　明治25年(1892)横山良八刊　　1枚＊

大判錦絵（印刷面縦３２．３、横２１．９糎）。姉大君を追慕する中君、背景は宇治の山荘。阿闍梨から蕨・つくづくし（土筆）の入った籠と「君にとてあまたの春をつみしかばつねをわすれぬ初蕨なり」の歌が贈られた。中君の手に阿闍梨への消息を書くための料紙、膝元には蕨・土筆の籠がある（次頁図）。右上の布目打色紙形に「早蕨／このはるは／たれにかみせん／なき人の／かたみにつめる／みねのさわらび」と刷るのは、中君の返歌。

押さえた色調と丁寧な描線が今なお魅力的である。尾形月耕（１８５８～１９２０）は才能豊かな江戸っ子絵師、日本画から陶磁器の絵付けまで幅広く活躍し、しかも独学であったことは驚嘆に値する。



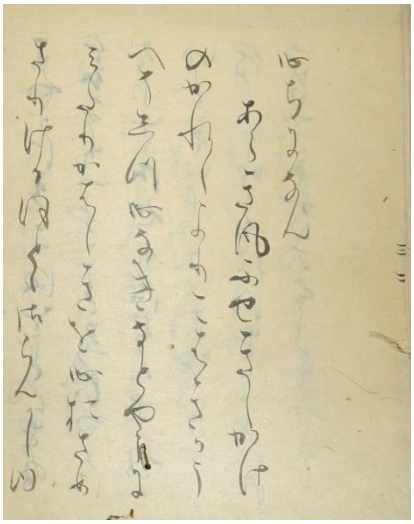
２つの籠に盛られた蕨と土筆は、鑑賞用ではなく食材と考えられる。煮物か蒸し物、もしくは羹にしたのであろう。時代が下ると、酒の肴としても用いられるようになる。

Ⅱ　菓子あれこれ

いつの時代もお菓子は嬉しいもの（辛党の方には、しばしのご辛抱）。ただし、平安時代の「菓子」は基本的にくだもの（果物）です。また加工品としてのお菓子も、「くだもの」と呼ばれました。甘味料の乏しい時代ですので、果実や僅かの甘味でも大いに歓迎されたことでしょう。

５ 源氏物語　若紫　未装丁升形残欠本　江戸時代前期写　　列帖装18冊

最終的な装丁に至る直前の状態で伝来した冊子本。本文の左右にやや幅広の余白があり、天地・木口は化粧裁ちせず不揃いのままである。本文共紙の斐紙表紙（縦１５．３、横１６．０糎）の左肩に「きりつほ」「はゝき木」等と本文同筆にて墨書、この外題は表紙が付けられると見えなくなる。表紙右下隅に巻序を示す別筆の書き入れがあり、古書肆の覚書か。



各帖巻頭に遊紙１丁を置き、次丁オモテより書き始め、毎半葉１０行１１字程度。巻が進むほど細字となり、夢浮橋では１４字前後に増える。全巻１筆、奥書・識語等なし。桐壺・帚木・若紫・末摘花・葵・明石・玉鬘・初音・若菜下・御法・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・蜻蛉・夢浮橋の１８帖存。まま本文料紙の端（丁のオモテ）に漢数字の書き入れ。これは括りと丁数を示し、装丁作業時に裁ち落とされるものである。和歌１首１字下げ３行書きが多いのは、この時期の写本としてやや珍しい（左図の右端「三　二」は第３括りの２丁目を意味し、「あらき風」の和歌が３行に書かれている）。本文は上品な能書、中世のしかるべき古写本を底本としたように見える。江戸時代初期まで遡る可能性もあろう。

展示箇所は、「わらはやみ」治療のため北山に赴いた光源氏が帰洛する場面。聖や僧都はもてなしに奔走する。見開き右面６行目「つかひありそうづよにみえ／ぬさまの御くだものなにくれと／たにのそこまでほりいでい／となみきこえ給ふ」の文章が目を引く。谷の底に求めた「くだもの」とは、どんなものであったのか。本文は、青表紙本系統の三条西家本に近い。

６ 古活字版源氏物語 薄雲 伝嵯峨本 慶長(1596～1615)頃刊　　袋綴14冊

薄く雲母を引いた香色無地紙表紙（縦２７．２、横２２．０糎）の中央に具引き雲母下絵刷り題簽（縦１８．２、横２．９糎）を押し、「薄雲」と刻す。題簽右下に「十九」と巻序を墨書。押発装あり。嵯峨本と称されるのに相応しい美麗な典籍。原装・原題簽のまま伝わる。見返し、本文共紙。遊紙なく本文を３０丁に刷り、毎半葉１１行２２字前後（印刷面縦２２．５、横１６．５糎程度)。大ぶりの平仮名に連続活字を交え、本阿弥光悦（１５５８～１６３７）流の闊達さが特徴である。本文料紙、楮紙。巻頭に「臨野堂文庫」「瀬能／蔵書」の蔵書印を押す。この印は前田夏蔭門下の国学者で長州藩に仕えた瀬能正路（１８０７～１８７０）の旧蔵であることを語る。「飯山／宮／之印」は長門国飯山八幡宮の所用印か。保存のよさが書物の魅力をさらに高めている・

掲出本は、昭和５０年（１９７５）東京古典会主催の入札会に５１冊のまとまりとして出品された後、中野区落合の古書肆に購われ、そこから散り散りとなる。図書館と当研究所の協力により、花宴・花散里・松風・薄雲・朝顔・螢・篝火・野分・横笛・夕霧・御法・紅梅・浮舟・蜻蛉の１４帖を集めた。なお収集の努力を継続したいが、嵯峨本に代表される美しい典籍は勿論、普通の古活字版の価格も高騰し、何冊集められるかはなはだ心許ない。他に掲出本のツレではない伝嵯峨本２帖（朝顔・真木柱）及び寛永頃刊行（２冊補配）の古活字版『源氏物語』を所蔵。古活字版は、本文系統論・享受史・印刷文化史の資料として大きな価値を持ち、今後一層の研究が望まれる。

明石御方が生んだ姫君は、紫上のもとに引き取られる。光源氏は、二条院西面を格別入念に整え子供用の小さな家具調度品も揃えた。見開き右面７行目「わか君はみちにてね／給にけりいたきおろされてなきなどはし給はず／こなたにて御くだ物参りなどしたまへど」と姫君が源氏邸に到着する場面を展示。３歳の子供に与えられた「御くだ物」は所謂お菓子か。冬のことなので、干した果実かもしれない。

(参考)源氏五十四帖 薄雲 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊　　1枚＊

大判錦絵（印刷面縦３２．３、横２１．９糎）に描かれた母子の別れ。冬景色を背景に立つ光源氏、その右に姫君（右図）と明石御方が配される。対角線上に主要人物が置かれ、緊張感のある画面を構成する。絵師尾形月耕については、**４源氏五十四帖　早蕨**を参照。この場面の後、**６古活字版源氏物語　薄雲**が続く。

７ 源氏物語抄(紹巴抄) 若菜上 古活字版 寛永(1624～1644)刊　　袋綴20冊

栗皮色無地紙表紙（縦２４．８、横１８．６糎)、押発装あり。題簽は各冊２枚を押し、左肩の縦長料紙（縦１５．１、横３．５糎）に「源氏物語抄　一」と巻序を、その右の横長料紙（縦７．９、横１３．４糎）に所載巻名を墨書。いずれも斐楮混漉きと思われる。見返し、本文共紙。内題「源氏物語抄」(巻首)。匡郭なく毎半葉１０行２３字前後に組む（印刷面縦２０．０、横１５．５糎程度)。川瀬一馬『増補古活字版の研究』によれば、『六百番歌合』と同種活字を襲用。大小の活字を使い、字粒が揃わない。新彫の活字も見られる。漢字平仮名交じり、稀に片仮名あり。朱引き・朱の句読・墨書き入れ多し。揃い本はごく稀。

三条西公条（１４８７～１５６３）の『源氏物語』講釈聞書を基に、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』等の諸説や撰者里村紹巴（１５２５～１６０２）の見解を加え、２０冊に纏めた注。『源氏二十巻抄』の別名もある。永禄８年（１５６５）一旦成立、幾度かの改訂を経て、寛永頃印行。これは『源氏物語』古注釈中最も早い出版である。その後、覆刻本や振り仮名を多く持つ整版本『源氏物語抄』が続く。最終冊末尾の原識語によれば、天正８年（１５８０）武州忍城主成田氏長に伝授された本を底本とする。各冊巻首に「青谿／書屋」の蔵書印は、大島雅太郎（１８６８～１９４８）の所用。大島は三井財閥の要人であり、竹柏園に属して和歌に造形が深かった。青谿書屋は世田谷代田にあった豪邸の名、膨大な蔵書もここに置かれるが、戦後散佚。集書顧問は源氏学者池田亀鑑（１８９６～１９５６）。

春３月、六条院に蹴鞠を楽しむ若公達へ酒食が供される。柏木が女三宮を垣間見してしまった有名な場面の直後、「つばいもちひ（椿餅）・梨・柑子やうのものども、様々箱のふたどもに取りまぜつつ…若き人々そぼれ取り食ふ、さるべきからもの（干物）ばかりして御かはらけまゐる」と書かれる箇所の注解を展示。儀式の一環として行われる饗宴と異なり、活気のある食事と言えよう。見開き左面行目から「つばいもちい　椿葉をへだてにしたる餅也、うつほの物／語に椿餅李柑子と云々、時分相違有べし、去年のか」「からもの　肴とみゆ」の注がある。果実の採取される時期と、当該場面の季節との差を指摘する紹巴の着眼がおもしろい。椿餅は、糯米に甘葛を合わせ椿の葉２枚で包んだ菓子らしく、蹴鞠の時に食する。

８ 花鳥余情 宿木 江戸時代後期写　　袋綴10冊

縹色布目紙表紙（縦２４．４、横１８．４糎）中央に四周単辺匡郭（縦１７．５、横２．９糎）を刷った題簽。匡郭内に「花鳥余情　一（～十）」と墨書、本文とは別筆か。見返し、本文共紙。本文料紙はやや粗い印象の楮紙を用い、毎半葉１１行２７字前後（書写面縦１８．５、横１４．０糎程度）。第１０冊末尾に「愚応仁之乱初避上都」以下の文明４年（１４７２）奥書・「此抄十五冊拭老眼馳禿筆」以下の文明８年奥書・「這抄一条禅閤所作也」以下の文明１２年奥書がある。諸本は、初稿本・再稿本・献上本に大別され、掲出本は再稿本に属する。

室町時代を代表する注釈『花鳥余情』は河内本系本文を使用しており、通説では文脈に即した読解に特徴があるとされる。しかし撰者一条兼良（１４０２～１４８１）は、有職故実や衣装に関しても並々ならぬ関心を寄せており、展示箇所に見える食物の注もその例。中君が匂宮の子を産み、その祝いの儀式に薫大将から種々の贈り物や料理が届く。「大将殿より屯食（とんじき）・碁手の銭・椀飯（わうばん）などは世の常のやうにて、子持ちの御まへの衝重ね三十、ちごの御衣五重襲ねにて…宮の御まへに浅香の折敷・高坏どもにてふずくまゐらせたまへり」の「ふずく」（粉熟）に、詳細な説明が付く。見開き右面３行目から「宮のおまへにせんかうのおしきたかつきども　ふずくまゐらせ／給へり」と立項し、「粉熟は五穀を五色にかたどりて粉にして餅になし／て、ゆでゝ甘葛（あまづら）おかけてこねあはせて、ほそき竹の／つゝをして其中にかたくおし入て、しばしおきてつき／出て、其姿双六調度のごとくまなぶ也、うつほ物がたり／内侍の上きたのおとゞよりまう人の御さかなおほえ／きまいらせ給、それにうちつゞきてふずく参れり」とある。なかなか

旨そうであり、一度食べてみたいと思いませんか。

９ 絵入源氏物語 蜻蛉 万治3年（1660）林和泉掾刊 横本　　袋綴29冊

紺色無地紙表紙（縦１４．７、横２１．３糎）の美濃版二つ切り本。元来全ての冊に押発装があったと思われるけれども大半は薄れて確認困難。第１５冊（若菜上）や第１８冊（夕霧・御法・幻）等の押発装が観察出来る。表紙中央に楮素紙題簽（縦１１．１糎、横幅不定）を貼り、所収巻名を刷る。『源氏物語』の本文２５刷・『源氏目案』３冊・『系図』と『山路の露』１冊の２９冊存。他の伝本に比して『引歌・表白』１冊を欠く。夢浮橋末尾に「写本云／抑此本以後崇光院宸翰…永正元稔七月日　台嶺末学　権僧正在判」とあるのは、先行する**３（参考）絵入源氏物語**を継承したもの。続けて「今此開板之本…龍集万治２年庚子／除念一日／林和泉掾板行」の刊記、「林和泉掾板行」の字句は『源氏目案』末にも存する。ただし本文版下と書肆名とは書風が異なり、書肆名部分を埋木訂正したものと考えられる。掲出本は、したがって初印と認めがたく、「渡辺忠左衛門」と刻す本が早い（吉田幸一『絵入源氏物語考』参照）。

本文は毎半葉１６行１４字前後（印刷面縦１２．０、横１８．０糎程度）、句読点・濁点・傍注等を付刻。絵は四周単辺（縦１１．８、横１８．６糎）内に収め、自然景観を描くところでは、横長画面の効果を上げている。展示箇所の見開き右面では、薫大将が氷に興じる女性達を透き見する。蓮の花が咲く暑さのさかりに、氷で涼を取るのである。部屋の中央、折敷のような器（もののふた）に置かれるのが氷。紙に包んで持つ女房もいて、「心づよく割りて、手ごとに持たり…紙に包みて御前にもかくて参らせたれど」に対応する（右図）。『源氏物語』の表現によると、ここに登場するのは「大人三人ばかり、わらはとゐたり」及び女一宮であり、薫に近い場所に小さい「わらは」、右手に女房（大人）３人、几帳の脇が女一宮と推される。

（参考）枕草子春曙抄 特製本 延宝2年（1674）北村季吟跋　　袋綴12冊

藍色地に卍・菊文等を艶刷りし銀箔を蒔いた紙表紙（縦２８．０、横１９．４糎）の贅沢な装丁、押発装の痕跡あり。左肩に銀泥下絵題簽（縦１８．８、横３．５糎）を貼り、「枕草子春曙抄　一（～十二）」と刻す。見返しは間合紙に銀砂子蒔き。「重遠之印」「大森氏／蔵書印」の使用者未勘。『枕草子春曙抄』の版本自体はありふれたものだが、表紙・題簽・見返しなど、これほどに凝った例を知らない（次頁図は題簽と銀砂子蒔きの表紙）。貴顕・豪商の手元に置かれた典籍か。刷りも良好、なかなかの美本であるが、初刷りとは言い難い。巻末季吟跋の署名に「慮庵」の印を持つものが最も早い印行であろう。

第１冊巻頭に清少納言の略伝・題号・諸本等を略述。この部分５丁の版心は「春曙一　発一（～四終）」、次いで「春曙一　発一ノ□」とある。第２丁より第４丁までは連続するが、第１丁・第５丁は１丁毎に独立する内容である。しかも第５丁は清少納言の伝記に関する記事なので、綴じ方を改め、版心に従って第１丁の後に現在の第５丁を置くべきであろう。

第６丁（版心は「春曙抄一　一」）より注解が始まる。第１２冊末尾に「清少納言枕草子者中古之遺風和語之俊烈也」以下延宝２年（１６７４）７月１７日の北村季吟（１６２４～１７０５）跋、刊記はない。

著名な、そして有益な注釈であるけれども、底本を能因本とするためか、今日では利用されることが少なくなった。『源氏物語』蜻蛉巻の氷にちなみ、展示箇所は『枕草子』中最もよく知られた章段のひとつ、「あてなるもの」（第３冊）。見開き右面９行目に章段名、「うすいろにしらがさねのかざみ、かりのこ、けづりひのあまづらにいりてあたらしきかなまりにいりたる」と続く。「けづりひ」（削り氷）と真新しい金属碗の取り合わせは、きわめて印象的。左面半ばに「あまづら」の注が見え、「甘葛…今の世の糖砂糖のやうに食物に和して用る物也」が見える。三巻本では「けづりひにあまづら入れて、あたらしきかなまりに入れたる」に作る。かき氷の祖型であろう。その他、早くから氷は酒と共に用いることもあった。

Ⅲ　食器と酒器

飲食の楽しみを一層大きくする脇役が、碗・皿・盃などの器です。「物は器で食わせるってえじゃあねえか」（『時蕎麦』）と江戸っ子なら言うところでしょう。この物語は当時の食文化を知る資料であるのみならず、家柄や儀式の盛大さを器に語らせているところは、さすが紫式部です。

10　源氏物語　末摘花　青表紙本･河内本両系統混合本　室町時代後期写　　袋綴7冊

薄く仕立てた藍色無地紙表紙（縦２２．８、横１５．５糎）は、当初のもの。橋姫巻には押発装も見える。表紙中央に蝋箋風の間合紙題簽（縦１０．６、横２．２糎）を押し、「すゑつむ花」と墨書、本文とは別筆。明石・橋姫の２帖は題簽落剥。本文は薄様斐紙を用い、毎半葉１０行１９字程度。和歌１首２字下げ２行書、末尾を改行する和歌独立形式である。見返し、本文共紙。見返し上部に龍文様の紙片（縦３．４、横２．７糎）を貼り、「わかむらさき／のならひ末／つむはな」と記す。「慶長頃写」と池田利夫博士のメモが附属、それより若干古い頃の写本ではなかろうか。朱合点・墨細字書き入れあり。空蟬・夕顔・末摘花の３帖は毎半葉１０行、明石・胡蝶・玉鬘・橋姫の４帖は９行書写とし、空蟬～末摘花、明石、玉鬘・胡蝶、橋姫の４手による分写。題簽は明石の手に近いか。いずれも闊達な書風。

空蟬・夕顔・末摘花・明石・玉鬘・胡蝶・橋姫の７帖存。うち空蟬～明石の４帖は河内本系本文を持ち、玉鬘以下３帖は青表紙本系本文である。「あさひさすのきのたるひもとけながら／などてかつらのむすぼゝるらん」（２７丁オ）の第４句「などてかつらの」は珍しい異文であり、青表紙本・河内本ともに「などかつらゝの」とする。提出本は、ここに「などかつらゝの　一本」と細字傍書し、青表紙本系統と校合の結果を示す。

展示箇所は、零落した末摘花邸でのわびしい食事場面。さすがに宮家らしい家具や器を

用いている。見開き左面１行目「だい・ひそく（秘色）などやうのもろこしの物なれど／人わろきに、なにのくさはひもなく／あはれげなるを」の下線部は、青表紙本が「ひそくやうの」に作る。また３行目「所＼／に」は、青表紙本の「すみのまばかりにぞ」と大きく異なるので、両系統の判別が容易である。「ひそく」は中国宋代の越州窯で焼かれた青磁らしく、高価な食器として用いられたであろう。落魄の宮家とは言え、往事の豪奢が偲ばれる。

（参考）河海抄　江戸時代初期写　巻1欠　　袋綴19冊

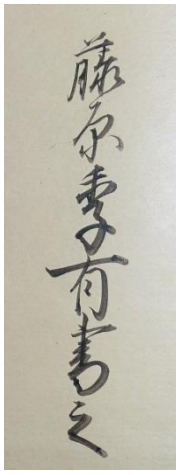
藍色無地紙表紙（縦２６．５、横２０．７糎）のやや幅広い装丁は、江戸時代初期の書物にしばしば採用される形式。現在全面的な補修を施しているので、押発装の有無が確認しづらい。表紙左肩に茶地蝋箋紙の題簽（縦１５．３、横２．７糎）を貼り、「河海抄二　帚木　　うつ蟬　夕顔」と墨書。この題簽料紙は渡来品すなわち明代蝋箋の可能性あり（下図）。題簽の文字は第５冊と同筆か。各冊前後に遊紙１丁を置き、次丁オモテより書写、毎半葉１３行３０字前後、漢字平仮名交じり。全体を６筆ほどで寄合書し、巻１８のみ朱書き入れがある。巻１の序・料簡・桐壺を欠く。巻頭に「矢野蔵書」、巻末に「月明荘」（古書肆反町弘文荘）の朱印。『弘文荘待賈古書目』には載せられていない。

１９冊存のうち、第６冊は表紙・題簽とも他の１８冊と差があり、紙質も僅かに厚く、他の冊とほぼ同時期の写本にて欠脱を補ったものと推される。第６冊の現在見返しとなっている丁は、しばらく仮表紙であったらしく、若干の汚れと「河海カミカズ四十七マイアリ」の墨書が見える。奥書・識語等なし。伝本は大きく中書本・覆勘本に分けられ、掲出本は中書本に属する。

８花鳥余情と並ぶ中世源氏物語古注釈の雄編。膨大な文献を引用し、散佚典籍の復元や、古典享受の研究に利用価値が高い。展示箇所は、「ひそく」の注。見開き左面１行目「御だいひそくやうのもろこしの物なれど　御台秘色／秘色事、今称秘色磁器」以下、「今案、秘色は石（磁か）器也、越州よりたてまつる物也、其色翠／青にして殊にすぐれたり、仍是を秘蔵して尋常に／不用之也、故号秘色云々」の解説が見える。越州窯の青磁は緑または黄緑色がやや強い焼き物で、舶来の貴重品。

11　源氏物語　須磨　藤原季有筆　江戸時代前期写　　列帖装6冊

現在、葵・蓬生・須磨・紅梅・早蕨の５帖存。ただし、当館へ纏めて入ったのではないため、須磨巻は別個の帙に収められる。葵巻は水濡れの跡が著しい。濃紺無地紙表紙（縦１６．４、横１７．２糎）の中央に金箔・薄藍・銀泥等の下絵題簽（縦１１．１、横２．１糎）を貼り、「すま」と墨書、本文とは別筆か。押発装あり。見返しは現在本文共紙だが、本来金布目紙を用いていたらしく、葵・早蕨巻にその痕跡が残る。本文料紙、斐紙。巻頭に遊紙１丁を置き、次丁ウラより毎半葉１１行２０字前後書写。墨付き４６丁。一般に物語は丁のオモテより書き始めるので、やや異例（歌書は丁のウラから）。和歌１首２字下げ２行書、その末尾は直接地の文に続く。墨補入・朱訂正等若干、これについては後に触れる。後遊紙中央に「藤原季有書之」とあり、書写奥書と見られる（左下図）。藤原季有は権大納言四辻公理（１６１０～１６７７）の息、承応４年（明暦元、１６５５）正４位下に



叙せられたが、その生没年は未勘。兄弟に季賢（１６３０～１６６８）がいて、おおよその活躍時期を推測しうる。寛文（１６６１～１６７３）年間書写の資料を目睹したことがあり、掲出本もこの時期に写されたのであろう。

本文系統は青表紙本の肖柏本・三条西家本に類する。以下、（　）内に通し番号を付して補入墨書を列挙れば、８丁ウラ「さらぬ人はとぶらひまいるもおもきとがめあり」（１）・１１丁オモテ「いふともなくて」（２）・１４丁オモテ「さるべき物どもみな＼／くばらせ給ふ」（３）・１５丁オモテ「いみじく」（４）・２１丁オモテ「さま」（５）・２４丁オモテ「つゝあつかひきこえ」（６）・同「にはかに引わかれて」（７）となる。これらの事例中、（２）は青表紙本の肖柏本・河内本の異文、（３）は肖柏本・別本の異文、（６）は河内本・別本に類似の文言あるも掲出本の独自異文、（７）は肖柏本・河内本・別本の異文であり、校合本はかなり特殊な本文であったらしい。所謂嫁入本ながら対校も丁寧に行われ、おもしろい研究材料である。朱訂正については省略。

展示箇所は、須磨へ赴く光源氏が感慨深く眺めた二条院。見開き右面７行目「だいばん（台盤）などもかたへはちりばみて」とある。台盤は食器そのものではないが、食器を載せる台として重要な調度品である。

12　源氏物語　賢木　奈良絵本　江戸時代前期写　　列帖装1冊

紺色地に金切箔・野毛・砂子を蒔き、霞・土坡・秋草等の金泥下絵を施した紙表紙（縦２４．０、横１７．７糎）は装飾性豊かな典型的嫁入り本の装丁。押発装あり。左肩に金泥下絵朱地題簽（縦１４．８、横３．４糎）を貼り、「さか木　十」と本文同筆にて墨書。見返し、金布目紙。本文料紙、厚手斐紙。巻首に遊紙１丁を置き、次丁オモテより書写。墨付６７丁、毎半葉１０行１７字前後。和歌１首３字下げ２行書、歌を地の文から独立させる形式であり、２行目は１行目よりさらに１字下げる。極彩色の大和絵８図。絵の前では散らし書きとし、不自然な余白が生ずることを避けている。この写し手は職業的な能書であったらしく、他にも奈良絵本本文を写した例が見られる。絵は天地に藍の霞引き・金箔蒔き、その構図は**３（参考）絵入源氏物語**と一致し、本文もまた同様。版本に依拠して調製された奈良絵本である。

展示箇所は、源氏の大将と「ふみつくり（漢詩創作）」や「いんふたぎ（韻塞）」の遊びを行い、負けた右方の頭中将が饗応する場面。「中将御かはらけまいり給ふ」に対応し、二人の貴公子の前に、「かはらけ」を載せた三宝が置かれる。庭の花は「はし（階）のもとのさうび（薔薇）」であろう。右面が散らし書きとなっている理由は先に述べた。

13　少女巻抄注　文政10年（1827）刊　鳥野幸次旧蔵　　袋綴1冊

縹色布目紙表紙（縦２５．１、横１７．９糎）左肩に４周単辺匡郭（縦１８．２、横２．５糎）を押し、「少女巻抄注」と刻す。紫の角裂・薄茶の綴じ糸ともに元来のもの。見返し、本文共紙。本文料紙、楮。千村仲雄序４丁・本文２６丁・本居大平跋３丁・中山美石跋３丁。著者鈴木朖（すずきあきら、１７６４～１８７３）の文政７年序は本文第１丁オモテにある。朱の書き入れ若干。

本文は４周単辺（縦２０．５、横１５．０糎）内に毎半葉１１行２５字前後。漢字平仮名交じり、合点を付刻する。版心「少女巻抄注　（丁数）」、後見返しに「文政十年亥初冬／出雲寺文治郎／吉田四郎衞門／風月荘左衞門」の刊記。少女巻より夕霧入学の場面を抄出・注解する。鈴木朖は、漢文学・国語学に卓越した業績を挙げ、尾張藩明倫堂でも教えた。本居宣長に入門、その縁で大平が序を寄せている。巻頭に「小笠原」「伊豆木」「鳥野蔵」の朱印を押す（左下図）。最後の印は鳥野幸次博士（１８７３～１９６１）の旧蔵を示す。朱の書き入れも鳥野博士のもの。博士は、学習院大学・國學院大学で教鞭を執られ、御歌所寄人として皇室に縁の深い研究者であった。

夕霧入学後、二条東院にて「あざな（字）つくること」が行われた。酒宴となって大学寮教官（博士）の頑迷固陋が戯画的に描かれる。展示箇所見開き右面３行目以下「賤しき博士ども、年齢の順に上座になみ居て夕霧／を下座につけたるなどなるべし」、左面７行目以下「へいじなんどもとらせ給へども／貴客に瓶子をとりて酌をせさせたるは、博士を上客と／して形のごとく敬ひ給ふ作法也」の説明がある。銚子ではなく瓶子を用いるのが、正式の作法とされる。

14　源氏物語　宿木　元禄3年（1690）中臣祐俊筆　　包背装10冊

朱地に紗綾形文様空押しの紙表紙（縦２４．６、横１７．９糎）を用い、紫綾織りにて背を包む。幕末か明治初年の改装か。関屋・胡蝶・行幸・柏木・幻・蜻蛉の６帖を欠く４８帖で伝来した。それを全１０冊に装丁し直したものであろう。現在の装丁となる前は、列帖装仮綴じであり、その段階の外題が内題として残る。見返し、銀揉箔散らし間合紙。本文料紙は斐紙だが、巻によって若干の差を見る。それぞれの巻は仮表紙・遊紙各１丁を置き、次丁オモテから毎半葉１０行２３～２８字程度に写す。全巻１筆。和歌３字下げ２行書き、その末尾は直接地の文に続く。朱の句読点・合点あり。第１冊・１０冊首尾に「宇田川／半痴印」の朱印を押す（右下図）。関西文壇の大御所と称された宇田川文海（１８４８～１９３０）の旧蔵。第８冊御法巻の後表紙に楮紙片（縦１４．２、横１９．５糎）を押し「源氏借り本」として、匂宮・竹河・紅梅等１５帖を列挙する。末尾に「〆十三冊」とあるのは、２帖合綴の巻があったゆえと推される。しかし掲出本とこの紙片とがどのように関わるのかは、不明。

本文は、青表紙本系の肖柏本に近い。若菜下・夢浮橋に欠丁があり、夢浮橋の分は江戸時代後期の筆跡にて袋綴４丁分補写。その次に長文の奥書、以下の通り。「此物がたり、ある人のぞみ侍るにより、まことに六そじ／みとせのほどふりて水ぐきのながれの末もおぼつか／なし、ひたすら言葉をしりぞけ申といへども、のちの／世までの思ひ出にと、しゐてこと葉をうけしゆへ／こそのみな月の比より心をおこし、又のとしなかばに／夢のうき橋をうちわたり、身の行末をたのま／むと筆うちすてゝゑかうのこゝろざしともなり／なんかし／元録三年午水無月中旬日／［　　］／［　　］」

最後の２行は磨り消し。短い行は別筆で「春日詞官」と書かれていたらしく、長い行（書写者の位署）は「新・三位・藤原・俊」と花押が推読出来る。元禄３年の諸資料を付き合わせて、「非参議正三位中臣藤原朝臣祐俊〔花押〕」と復元してみた。中臣祐俊は当時６３

歳、まさしく「六そじみとせのほど」に該当する。また春日大社の預でもあったので、別筆注記「春日詞官」は、「春日祠官」の誤りと見てよかろう。

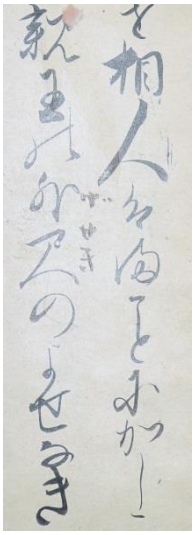
権大納言に昇進し右大将を兼ねた薫のもとに帝鍾愛の女二宮が降嫁する。藤壺にて盛大な祝宴が行われるところを展示した。見開き左面５行目「るりの御さかづき、へいじはこんるりなり」とあり、この時代「るり（瑠璃）」はガラスを意味するので、透明な盃とコバルトブルーの瓶子を使用したことになる。その他祝宴には「沈の折敷・紫檀の高坏・白銀の様器」も並び、美麗豪奢の極みと言えよう。

Ⅳ　喜び・悲しみ・笑い

飲食は、ひとの暮らしに欠かせない要素です。生活のさまざまな局面で喜怒哀楽の随伴者となり、かけがえのない思い出の一齣を飾ってくれるのも、「飲んだり食べたり」の大切な働き。『源氏物語』は、お酒や食材、儀式的な供え物までも見事に使いこなし、作品の厚みとしています。

15　源氏物語　桐壺　江戸時代前期写　　列帖装1冊

瑞雲・巻龍を織り出した青磁色緞子表紙（縦２４．５、横１７．２糎）中央に墨流し文様斐紙題簽（縦１６．５、横３．５糎）を押し、「きりつほ」と墨書、本文とは別筆であろう。見返しに本文と異質の斐紙を用いる。表紙は古雅緞子だが、元来紙表紙であったものの改装と推される。本文の前に遊紙なく、第１丁オモテより書写する点も、原装ではない――改装に際して巻頭１丁を失った――ことを示唆する。毎半葉１０行１９字前後。和歌１首３字下げ２行書、末尾は直接地の文に続く。墨付２７丁、その後ろに遊紙１丁。奥書・識語等なし。

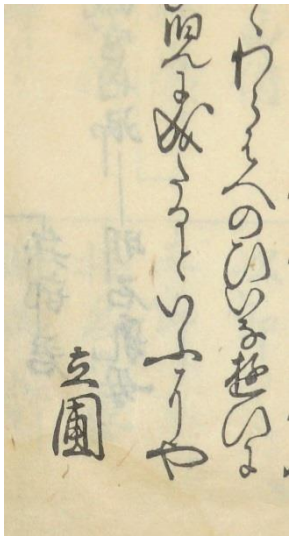


本文は青表紙本系の三条西家本に近い。朱・墨の書き入れ若干。書き入れの例を示すと、「みこゝろ」（１２丁オモテ「御心」の右）・「み」と濁点（１３丁オモテ「御く」の右）・「タイエキノフヨウヒヨウ」（１５丁オモテ「太液の芙蓉未央」の右）等が朱、「もイ」（１４丁ウラ「おほすも」の右）・「げせき」（１９丁ウラ「外尺」の右）等が墨である。「げせき」は「外戚」の訓として珍しいが、根拠不明（左図）。

光源氏１２歳、元服の場面を展示する。母更衣が存命であったなら、と帝の感慨は深い。「とりわき仰せごとありてきよらを尽くし」た儀式であり、大御酒・折櫃物・籠物・屯食などが調えられた。見開き左面４行目後半から「人々おほ／みきまいるほど、みこたちのすゑに源氏つき給へり」と、元服後の光君が描かれる。

16　十帖源氏　行幸　万治4年（1661）刊　　袋綴10冊

縹色地に紗綾形・唐草等を型押しした紙表紙（縦７．５、横１９．８糎）中央に楮紙題簽（縦１７．１、横３．４糎）を押し、「十帖源氏　一（十）」と刷る。ただし、第６冊の題簽は落剥。各冊巻頭に目次、本文は毎半葉１１行２２字前後、匡郭なし（印刷面縦１９．



５、横１５．５糎程度)。漢字平仮名交じり、夾注・傍注を付刻する。絵は四周単辺（縦１９．２、横１５．５糎）内に収め、全１３１図。著者野々口立圃（１５９５～１６６９）自身の描くものである。第１冊巻頭に石山寺伝説（源氏物語起筆説話)、第１０冊末尾に立圃の跋。この跋文が成立及び版種分類の重要な鍵である（左下図)。刊記なし。無刊記本の他、万治４年（１６６１）荒木利兵衛版があり､提出本は万治４年刊本の刊記削除本と見ておく。しかし無刊記本を有刊記本に先立つものと推定する説（吉田幸一『絵入源氏物語考』上）もあり、版の種類及び刊行の前後に関しては問題が複雑である。帙外題に「寛文元年刊」と墨書するが、根拠不明。

撰者立圃は書・俳諧・文章・絵などに通じ、雛人形細工を家業とした。寛文１０年（１６７０）には、掲出本とは別に『おさな源氏』を述作、こちらは絵１２０図を持つ。『十帖源氏』の成立は、跋文により撰者が還暦を迎えた承応３年（１６５４）と推定される。

光源氏３７歳の春、内大臣を腰結い役として玉鬘の裳着が行われた。見開き右面、玉鬘は実の父と対面、源氏と内大臣との間柄も修復なって、めでたしめでたしの絵である。裳着の式では「御さかな・御かはらけ」が出され、簀子近く並ぶ二人が源氏と内大臣であろう。この場面の前に「心弱くおはしまさぬ六条殿（源氏）も、ゑひなき（酔ひ泣き）にや、うちしほたれ給ふ」と書かれ、『源氏物語』の「ゑひなき」は、甘さも苦さも一緒に飲み下すところがある。

17 源氏物語 藤裏葉 江戸時代初期写　　袋綴1冊

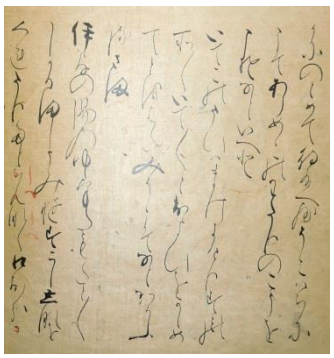
渋色無地表紙（縦２５．２、横１８．９糎）中央に楮紙題簽（打紙か、縦１５．２、横３．１糎）を貼り、「藤のうら葉」と墨書、本文とは別筆。押発装あり。見返し、本文共紙。遊紙１丁を置いて次の丁オモテより書写。毎半葉１０行１９字前後（書写面縦２１．０、横１５．５糎程度)、朱の句読点・合点あり。墨付２８丁、後ろにも遊紙あり。奥書・識語等なし。墨による訂正・書き入れ若干。「されは」の「は」に「と」と傍書、「こたち」（１０丁ウラ）に声点、「きしろう」の「う」に「ふイ」と傍書、「くらゐ給はり」（２０丁ウラ）の「給」に「え給ふイ」と傍書などである。

朱句読点のある伝本は河内本本文を持つものが多いけれども、青表紙本系大島本にほぼ同じ。合点は引歌の所在を示す。闊達な能書に室町時代の名残が感じられ、江戸時代の早い頃写されたと見ておく。

夕霧と雲井雁の結婚、夕霧の中納言昇進（この時代の中納言は立派な閣僚)、「太上天皇になずらふ位」付与、六条院への行幸と、光源氏の栄華は続く。今上帝の行幸には朱雀上皇の御幸が重なり、例のない盛儀となった。鵜飼や鷹狩りの獲物を「調じて御ものにまゐる」ことに加え、酒が入って「みな酔ひになりて、暮れかかるほど」、雅楽の演奏となる。展示箇所左面８行目「ひんがしの池にふねどもうけて、みづし／所のうかひ（鵜飼）のおさ、院のうかひをめしならべて、うをおろさせたまへり」と書かれ、六条院にも鵜飼担当組織があった。

18 源氏物語 若菜下 桔梗唐草文様表紙本 室町時代後期写(9冊補写)　　列帖装52冊

薄茶地に唐草・桔梗を刷った蝋箋風紙表紙（縦１７．３、横１７．５糎）には押発装あり。表紙中央に薄藍色楮紙題簽（縦１０．８、横２．２糎）を押し、本文と別筆にて巻名を墨書。若菜下の場合、摩滅により外題は薄れて難読。見返し、本文共紙。本文料紙は斐紙であるけれども、巻によって紙質に差がある。遊紙１丁を置き、次丁オモテより書写、毎半葉８～１２行、若菜下の場合、１１行１６字前後。数人の寄合書。堂々とした速度感ある書風が多い。段落のように地の文を改行する（空蟬、左図）もあり、多様な書写形態を持つ。和歌の書き方も一定ではなく、１首２字下げ２行書とし前後を改行、あるいは１字下げ２行書で末尾を直接地の文に続ける形式などがある。



螢・若菜上の２帖を欠く５２帖。そのうち室町時代まで遡りうるもの４３帖、江戸時代前～中期に補われたのが９帖、具体的には葵・賢木・関屋・松風・朝顔・藤裏葉・横笛・幻・早蕨が補写である。補写は数手により行われ、一回的な作業であったかどうかも不明。おそらく補写の最終段階で現在の装丁としたのであろう。木口を見ると、汚れのようではあるが補写の巻には綴じ目に近く墨の短線が引かれ、目印となっている（左図）。元来の４３冊と区別する意図があったらしい。なお、現在欠けている螢・若菜上が、そもそも補写されなかったのか、あるいは補写されたものの現在までに脱したのかは、判断出来ない。

本文系統は概ね青表紙本であるが、異同の細部にわたる検討・筆者の分類・１帖１帖の本文精査・補写時期の特定など、今後に残された問題が山積する。

光源氏の栄光に翳りが見え始め、正室女三宮と柏木との密通事件も発生する。山の帝（朱雀院）五十の御賀のために試楽を開催、引き籠もりがちな衛門督柏木に参加を強要する。展示箇所は、源氏の皮肉に柏木が苦悶する場面。見開き右面１０行目後半から「院すぐるよはひ／にそへてゑひなき（酔ひ泣き）こそとゞめがた／きわざなりければ、衛門督心とゞめてほゝゑ／まるゝ、いとゞ心はづかしや、さりともいまし／ばしならん、さかさまにゆかぬ年月よ、おひ（老）はえのがれぬわざなり」の深刻な文章が始まる。これを「たはぶれのやう」に語りかけ、「（盃を）持たせながら、たびたびしひたまへば」の結果、柏木は悩乱、病に臥せる。

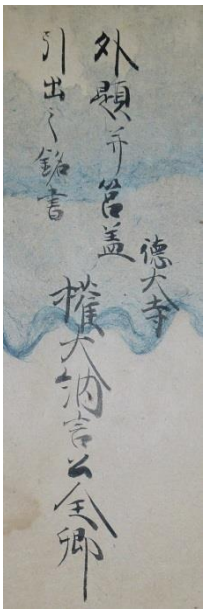
19 源氏物語 夢浮橋 中山篤親等寄合書 (付)筆者目録　　列帖装54冊

鶯色地に金茶・白茶の宝尽くし文様を織り出した緞子表紙（縦２５．０、横１８．３糎）は、金切箔散らし間合紙見返しと共に近年の装丁。左肩に押された金泥下絵絹地題簽（縦１６．８、横３．０糎）は、付属の筆者目録通り徳大寺公全（１６７８～１７１９）の手と推されるので、おそらく未装幀のまま題簽と併せて伝来し、当館に入る前に装丁されたのではないか。後述の書物箪笥については、詳細不明。

本文料紙、斐紙。毎半葉１０行２２字前後（書写面縦２０．０、横１４．５糎程度）、和歌１首２字下げ２行書、その末尾は直接地の文へ続く。巻頭の遊紙２丁があり、第１の遊

紙に本文と別筆の墨書「夢のうき橋　二おり」、これと同趣旨の書き入れが全冊に見られ、調製に際しての備忘である。本来表紙に糊付けされるはずの丁が糊跡もなく残り、墨書も鮮明に読めるのである。これは、未装幀のままの伝来したことの傍証であろう。本文系統は青表紙本系の三条西本に近い。当該夢浮橋巻の第１括りにかなりの錯簡を持つので、繙読には注意を要する。

この『源氏物語』は、公卿２７名が参加した書写活動の結果出来上がったものであり、上席の内大臣徳大寺公全が題簽揮毫の役を引き受けたと考えられる。各冊末尾に筆者の署名が見え、桐壺は中山篤親（１６５６～１７１６）の担当、掲出の夢浮橋巻には「這一冊遂書写畢／藤基勝」の奥書、「藤基勝」は園基勝（１６６３～１７３８）である。書写を分担した公卿の生没年から、おおよその調製年代を推測しうるが、さらに外山光和（１６８０～１７４３）の署名により、改名（もと勝守）の宝永２年（１７０５）以降、筆者目録作成の正徳２年（１７１３）以前に限定出来る。



薫大将は、浮舟の消息を訪ねて横川に登る。そこで供された「御湯漬け」は僧都の心づくしであった。「御湯漬け」の具体的な中身は何であったか。先へ読み進むと、展示箇所見開き右面２行目「ひきぼし奉りたりつる（僧都の）返事に、大将殿（薫）おは／しまして、御あるじのこと、にはかにするを、いとよきおりとこそありつれ」と書かれるので、小野の里から横川へ届けた「ひきぼし」（干した海草）が薫の食膳に上ったと分かる。いかにも僧侶向けの食材であるが、「御湯漬け」の具を忘れた頃に種明かしする巧みさは、些細な事例ではあるけれども感嘆に値する。

筆者目録は、天藍地紫の厚手斐紙を折紙（縦１８．９、横５１．５糎）とし、水引にて綴じた極めて上等なもの。毎半葉１２行、内題「源氏物語筆者目録」。末尾に「正徳二年／季冬中旬　古筆了音〔琴山〕」の奥書がある。了音は古筆家歴代中目利きの評判が高かった人物。この目録には「外題并筥蓋引出之銘書」とも記されるので、巻名を蒔絵にした豪華な書物箪笥も用意されたのであろう（右上図）。

20　絵入源氏物語　帚木　小型本　江戸時代前期刊　　袋綴30冊

藍色表紙（縦１５．７、横１１．１糎）中央に間合紙題簽（縦１０．０、横３．９糎）を貼り、「桐　　／はゝ　　」と刷る。収載帖数によって、題簽幅に差あり。多くの冊において無地表紙の如く見えるけれども、唐草・瑞雲等を艶刷り。伝来の過程で文様が摩滅した。押発装あり。表紙・題簽とも刊行当初のもの、したがって各冊２～３帖の綴じ方も、出版時の姿を伝えるのであって、後代の合冊ではない。見返し、本文共紙。遊紙を置かず、第１丁オモテより刷り始める。本文は四周単辺（縦１１．５、横８．６糎）、毎半葉１１行２１字前後平仮名交じり。傍注・合点・句読点・濁点等を付刻する。刷りはかなり良好。刊記なし。

『源氏物語』本体５４帖２５冊、『山路露・系図』１冊、『爪印』（『源氏目案』に同じ）３冊、『引歌』１冊の３０冊。**３（参考）絵入源氏物語慶安３年跋本・９絵入源氏物語万治３年刊横本**に続

く絵入本。江戸時代後期まで刷り増しされ伝存数は多いが、出版時の原態を留めるものは少ない。与謝野晶子（１８７８～１９４３）が親しんだのは、この小型本である。古い塗り箱入り。先行する慶安３年跋本・万治３年刊横本のうち、直前の万治横本ではなく慶安３年本に依拠したと考えられる。慶安３年跋本の優美な大和絵に比べ、小型本は素朴で野趣に富む画風であり、それぞれのおもしろさを発揮する。

風邪をひいた博士の娘、治療のために蒜（ひる）を食し、その猛烈な匂いに婿殿も辟易。さすがに学識十分の才女だけあって、ずらずらと漢語を並べる。曰く「ふびやう（風病）重きにたへかねて、ごくねちのさうやく（極熱の草薬）をぶく（服）して、いとくさきによりなむえたいめん給はらぬ」。展示画面左下に鼻を蔽って退散する式部丞（右上図）、奥が博士の娘。見開き左面２行目に若公達の哄笑「君たちあさましと思て、そらごとゝてわ／らひ給」が記される。

源氏物語　飲んだり食べたり　解題目録